

現代日本小説大系

30

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第三十卷

河出書房版

現代理本小說大系 第三十三卷

昭和二十七年六月二十五日  
昭和二十七年六月三十日

初版印刷  
初版發行

定價 貳百參拾圓

地方定價 貳百四拾圓

代著者

荒畑寒村

發行者

河出孝雄

編集者

荒正人

印刷者

東京都文京區関口町一四〇番地  
盛英信

發行所

東京都千代田區  
神田小川町三ノ八 株式會社

河出書房

電話神田(25) 二三四七番  
三一七四番

目次

石川啄木

我等の一團と彼

雲は天才である

荒畑寒村

艦底

逃避者

六

五

三

三

平出 修

計 畫 ..... 二六

逆 徒 ..... 二八

上司 小 劍

下 積 ..... 二九

英 靈 ..... 三三

女帝の悩み ..... 三六

小川 未明

靴屋の主人 ..... 三三

堤防を突破する浪 ..... 三六

# 長谷川如是閑

象やの糸さん……………一七四

あるカフェーの娘……………一九三

# 宮地嘉六

竹本一座……………二一〇

煤煙の臭ひ……………二二四

彼の生涯の第二期……………二三三

# 武林無想庵

ビルロニストのやうに……………二四六

Cocu のなづみ……………二六一

# 宮本百合子

彌宜様宮田

三三

一つの芽生

三四

解 説（荒 正人）

三七

石川啄木

我等の一團と彼  
雲は天才である



# 我等の一團と彼

## 一

人が大勢集まつてゐると、おのづから其の間に色別けが出来て来る——所謂黨派といふものが生れる。これは何も珍らしいことではないが、私の此間までゐたT——新聞の社會記者の中にもそれがあつた。初めから主義とか、意見とかを立てゝ其の下に集つたといふでもなく、又誰もそんなものを立てようとすゝる者もなかつたが、たゞ何時からとなく五、六人の不平連がお互ひに近づいて、不思議に氣が合つて、そして、一種の空氣を作つて了つたのだ。

先ず繁々往來をする。遠慮のない話をする。内職の安著述の分け合ひをする。時々は誘ひ合つて、何處かに集まつて飲む。——それだけのことに過ぎないが、この何處かに集まつて飲む時が、恐らく我々の最も得意な、最も楽しい時だつた。氣の置ける者はゐず、酒には弱し、直ぐもう調子よく酔つて來て、勝手な熱を吹いては夜更かしをしたものだ。何の、彼のと云つて騒いでるうちには、屹度社中の噂が出る。すると誰かが、赤く充血した、其の癖何處かところとした眼で一座を見廻しながら、慷慨演説でもするやうな口調で、「我黨の士は大いにやらにや可かんぞ。」などと言ひ出す。何をやらにや可かんのか、他から聞いているは一向解らないが、座中の者にはよく解つた。少くとも其の言葉の表してゐる感情だけは解つた。「大いに然り。」とか、「やるとも。」とか即座に同意して了ふ。さあ、斯うなると大變で、何れも此れも火の出るやうな顔を突き出して、明日にも自分等の手で社の改革を爲す遂げて見せるやうなことを言ふ。平生から氣の合はない同僚を、犬だの、黴菌だの、張子だの、麥酒壘だのと色々綽名をつけて、糞味噌に罵倒する。一人が小皿の縁を箸で叩きつけて、「一體社では我々紳士を遇するの途を知らん。あんな品性の下劣な奴等と一緒にされちや甚だ困る。」と力み出すと、一人は、胡坐をかいた股の間へ手焙りを擁へ込んで、それでも足らずにちりちりと騒り出しながら、「さうぢや。徒らに筆を弄んで食を偷む。のう文明の盜賊とは奴等の事つちや。社會の毒蟲ぢや。我輩不敏といへども奴等よりはまだ高潔な心をもつとる。學問をせなんだ者は眞に爲様がないなあ。」と酒臭い息を吹いてそれに應ずる——そして我々は、何時誰が言ひ出したともなく、自分等の一團を學問黨と呼んでゐた。

尤も、酔ひが醒めて、翌日になつて出勤すると、嵐の明くる朝と同じことで、まるで様子が違つた。誰を見てもけろりと忘れたやうな顔をして済ましてゐる。「昨夜は愉快ぢやつたなあ。」と偶に話しかけてみても、相手はたゞ、「うむ。」と言つて妙な笑ひ方をして見せる位のことだ。命令が出ると何處へでも早速飛び出して行つた。悪い顔をする者もなければ、怠ける

者もなかつた。他の同僚に對しても同じで、殊更に輕蔑するの、口を利かぬのといふことはしない。ただ少し冷淡だといふに過ぎない。が、何か知ら事があると、連中のうちで、紙片を圓めたのを投げてやつて、眼と眼を見合はせて笑ふとか、不意に背中をどやしつけて、それに託けて高笑ひをする位のことはあつた。意氣地がないと言へばそれまでだが、これは然しさうあるべき筈だつた。反對派と言つた所で、何も先方が此方に對抗する黨派を結んでゐたといふでもない。言はば、我々の方で勝手に敵にしてゐただけの話だ。自分等が自分等の意見を行ふ地位にゐないといふ外には、社に對してだつて別に、大した不平を持つてゐたのではないのだから。——それに、これは餘り人聞きの好いことではないが、T——新聞は他の社よりも月給や手當の割がずつと好かつた……………

この「我が黨の士」の中に、高橋彦太郎といふ記者があつた。我々の間では年長者の方で、もう三十一、二の年齢をしてゐたが、私よりは二、三箇月遅れて入社した男だつた。先づ履歴から言ふと、今のY——大學がまだ専門學校と言つてゐた頃の卒業生で、卒業すると間もなく中學教師になり、一年ばかり東北の方に行つてゐたらしい。それから東京へ歸つて來て、或政治雜誌の記者になり、實業家の手代になり、遂々新聞界に入つて、私の社へ來る迄に二つ、三つの新聞を歩いた。——ざつとこんなものだが、詳しいことは實は私も知らない。一體に自分に關した話は成るべく避けてしない風の男だつた。が、何かの序に、經濟上の苦しみだけは學生時代から随分嘗めたやうなことを言つたことがある。地方へ教師になつたのは、恩のある

母（多分繼母だつたらう。）を養ふ爲で、それが死んだから早速東京へ歸つたのだといふ話も聞いたやうに記憶してゐる。細君もあり、子供も三人があつたが、何處で何うして結婚したのか、それは少しも解らない。此方から聞いて見ても、「そんな下らぬ話をする奴があるものか。」といふやうな顔をして、でんで相手にならなかつた。第一我々の仲間で、その細君を見たといふ者は一人もない。郊外の、しかも池袋の停車場から十町もあるといふ處に住んでゐて、人を誘つて行くこともなければ、又、いくら勧めてももつと近い處へは引越して來なかつた。

最初半年ばかりは、社中にこれといふ親友も出來たらしく見えなかつた。何方かと言へば口が重く、それに餘り人好きのする風采でもないところへ、自分でも進んで友を求めるといふやうな風はなかつた。「高橋さあん。」と社會部の編輯長が呼ぶと、黙つて立つて其の前へ行く。「はい」と言つて命令を聞き取る。上等兵か何かが上官の前に出た時のやうだ。渡された通信の原稿を受け取つて來て、一通り目を通す。それから出懸けて行く。急ぐでもない、急かぬでもない、他の者のやうに、「何だ、つまらない。」といふやうな顔をすることもなければ、眼を輝かして、獲物を見附けた獵犬のやうに飛び出して行くこともない。電話口で交換手に怒鳴りつけることもなければ、眺へた辨當が遅いと言つて給仕に劍突を喰はせることもない。そして歸つて來て書く原稿は、若い記者のよくやるやうな、頭つ張りばかり強くて、終末に行つて氣の抜けるやうなことはなく、穩しい字でどんな事件でも相應に要領を書きこなしであるが、其の代り、これといふ新しきも、奇抜なところもない。先づ誰が

見ても世慣れた記者の筆だ。書いて了ふと、片膝を両手で抱いて、煙窩を椅子の背に載せて、處々から電燈の索の吊り下つた、煙草の煙りで煤びた天井を何處といふことなしに眺めてゐる。話をすることもあるが、話の中心になることはない。猶更子供染みた手柄話などをするとはなかつた。つまり、一口に言へば、何一つ人の目を惹くやうなところの無い、或は、爲ない男だつた。

私も、この高橋に對しては、平生餘り注意を拂つてゐなかつた。同じ編輯局にゐて、同じ社會部に屬してゐたからには、無論毎日のやうに言葉は交はした。が、それはたゞ通り一遍の話で、對手を特に面白い男とか、厭な男とか思ふやうな機會は一度もなかつた。これは一人私ばかりでもなかつたらしい。ところが或時、例の連中、(其の頃漸く親しくなりかけた許りだつたが)或處に落ち合つて、色々の話の末に、社中の誰彼の棚下しを始めた。先づ上の方から、羽振りの好い者から、何十人の名が大抵我々の口に出つた。其の中に高橋の噂も出た。

『おい、あの高橋といふ奴な、彼奴も何だか變な奴だぜ。』と一人が言つた。

『さうぢやのう。僕も彼奴に就いちや考えとるんぢやが、一體あの男あ彼の儘なんか、それとも高く留まつてゐるんか?』

『高く留まつてゐるんでもないね。』と他の一人が言つた。『何ちもさうではないやうだね。あれで却々親切なところがあるよ。僕は此間の赤十字の總會に高橋と一緒に رفتつたがね。』

最初の一人は、『それに彼奴は色んな事を知つとるぜ。何時か寒石老人と説文の話か何かしとつた。』

『さうぢや。僕も聞いとつた。何しろ彼の男あ一癖あるな。第一まあ彼の面を見い。ぽかんとして人の話を聞いとるが、却々油斷ならん人相があるんぢや。』

斯う言つたのは劍持といふ男だつた。皆は聲を合はせて笑つたが、心々に自分の目に映つてゐる高橋の風采を思ひ浮かべてみた。中背の、日本人にしては色の黒い、少しの優しきもないほどに角ばつた顔で、濃い頬髯を剃つた痕が何時までも青かつた。そして其の眼が——私は第一に其の眼を思ひ出したので——小さい、鋭い眼だつた。そして言つた。

『一癖はあるね、確かに。』

然し、それは言ふまでもなく眞の其の時の思ひ付きだつた。劍持はしたり顔になつて、『僕はな、以前から高橋を注意人物にしとつたんぢや。先づ言ふとな、彼の男には二つの取柄がある。阿諛を使はんのが一つぢや。却々頑としたところがある。それから、我々新聞記者の通弊たる自己廣告をせん事ぢや。高橋のべちやくちや喋りをするのは聞いたことがないぢやらう?』とところがぢや、僕の經驗に據ると、彼あした外觀の人間にや二種類ある。第一は、あれつきりの奴ぢや。顔ばかり偉さうでも、中味のない奴ぢや。自己廣告をせんんだり、阿諛を使はんたりするのは、そんな事する才能がないからなんぢや。所謂見かけ倒しという奴ぢやな。それから第二はぢや。此奴は始末に了へん。一言にして言ふと謀反人ぢやな。何か知ら身分不相應な大望をもつとる。さうして常に形勢を窺うとる。僕の郷里の中學に體操教師があつてな、其奴が體操教師の癖に、後になつて解つたが、校長の椅子を覬つとつたんぢや。嘘のやうぢやが嘘

ぢやない。或時其の校長の悪口が土地の新聞に出た、何でも藝妓を孕ましたと言ふんぢや。すると例の教師が體操の時間に僕等を山に連れて行つて、大きな松の樹の下に圓陣を作らしてなあ、何だか様子が違ふ哩と思つとると、平生とはまるで別人のやうな能辨で以つて、慷慨激越な演説をおつ始めたんぢや。君達四年級は——其の時四年級ぢやつた——此の學校の正氣の中心ぢやから、現代教育の腐敗を廓清する爲にストライキをやれえちふんぢや。』

『やつたんか？』

『やつた。さうして一箇月の停學ぢや。體操の教師は免職よ。』

其奴がよ、何處か思ひ出して見ると高橋に肖とるんぢや。『すると何か、彼の高橋も何か大望を抱てゐると言ふのか？』『敢てさうぢやない。敢てさうぢやないが、然し肖とるんぢや。實に肖とるんぢや。高橋がよく煙草の煙をふうと天井に吹いとるな？ あれまで肖とるんぢや。』

『其教師の話は面白いな。然し劍持の分類はまだ足らん。』最初高橋の噂を持ち出した安井といふのが言つた。『あんな風の男には、まだ一つの種類がある。それはなあ、外ではあんな具合に一癖ありさうに、構へとるが、内へ歸ると細君の前に頭の學がらん奴よ。しよつちゆう尻に布かれて、本人も亦それを喜んでるんさ。愛情が濃かだとか何とか言つてな。彼あして鹿つべらしい顔をしとる時も、奚ぞ知らん細君の機嫌を取る工夫をしとるかも知れんぞ。』

これには皆吹き出して了つた。啻に吹き出したばかりでなく、大望を抱いてゐるといふ劍持の觀察よりも、毎日顔を合は

せながら別に高橋に敬意をもつてゐたでもない我々には、却つて安井の此の出鱈目が事實に近い想像の様に思はれた。

が、翌日になつてみると、劍持の話した體操教師の話が不思議にも私の心に刻みつけられたやうに残つてゐた。それは私自身も、劍持と同じく、半分は教師の煽動で中學時代にストライキをやつた經驗をもつてゐた爲だつたかも知れない。何だか其教師が懐しかつた。そして、それに關聯して、おのづと同僚高橋の舉動に注意するやうになつた。

四、五日經つと、其の月の社會部會の開かれる日が來た。我我の一派は、會議などとなると、妙に皆沈黙を守つてゐる方だつた。で、其の日も、編輯長の持ち出した三つか、四つの議案は、何の異議もなく三十分かそこいらの間に通過して了つた。

其議案の中には、近頃社會部の出勤時間が段々遅れて、十一時乃至十二時になつたが、今後晝の勤務に當つてゐる者は、午前九時までに相異なく出社する事、といふ一箇條もあつた。

會議が濟むと皆どやどやと椅子を離れた。そして、沓音騒がしく編輯局に入つて行つた。我々も一緒に立つた。が、何時もの癖で、立つた機會に呖呻をしたり、伸びをしたりして、二、三人會議室の中に残つた。すると、も一人我々の外に残つた者があつた。高橋だ。矢張皆と一緒に立つたが、其の儘窓際へ寄つて行つて、何を見るのか、ちつと外を覗いてゐる。

安井は廊下の靜かになるのを待ちかねたやうに、直ぐまた腰を掛けて、

『今日の會議は、何時もよりも些と意氣地が無さ過ぎたのう？』『何故君が黙つとつたんぢや？』劍持はさう言つて、ちらと高

橋の後姿を見た。そして直ぐ、

『若し君に何か言ひたい事があつたならぢや。』

『大いにある、然し僕みたいな者が言ひ出したつて、何が始まるかい？』

『始まるさ、何でも始まる。』

『これでも賢いぞ。』

『心細い事を言ふのう。』

『然し、まあ考へて見い。第一版の締切が何時？ 五時だらう？ 午前九時に出て来て、何の用があるだらう？ 十時、十一時、十二時……八時間あるぞ。今は昔と違つてな、俾もあれば、電車もある。乗つたことはないが、自動車もある世の中だ……』

『高橋君。』私は巻煙草へ火を點けて、斯う呼んでみた。安井はふつと言葉を切つた。

『うむ？』と言つて、高橋は顔だけ此方へ捻ぢ向けた。その顔を一目見て、私は、「何を見てゐたのでもないのだ。」と思つた。そして、

『今の決議は我々朝寢坊には大分徹へるんだ。九時といふと、僕なんかまだ床の中で新聞を讀んでる時間だからねえ。』

『僕も朝寢はする。』

さう言つて、靜かに私の方へ歩いて來た。何とか次の言葉が出るだらうと思つて待つたが、高橋はそれつきり口を噤んで、黙つて私の顔を見てゐる。爲方がないから、

『此間内の新聞の社説に、電車會社が營業物件を虐待するつて書いてあつたが、僕等だつて同じぢやないか？ 朝の九時から

來て、第二版の締切までゐると、彼は十時間からの勤務だ。』

『可いさ。外交に出たら、家へ寄つて緩り晝寢をして來れば同じ事だ。』

これが彼の答へだつた。

劍持は探りでも入れるやうに、

『僕は又、高橋君が何とか意見を陳べてくれるぢやらうと思つた。』

『僕が？ 僕はそんな柄ぢやない。なあに、これも矢つ張り資本主と勞働者の關係さ。一方は成るべく樂をしようとするし、一方は成るべく多く働かせようとするし……この社に限つたことぢやないからねえ。どれ、行つて辨當でも食はう。』

そして入口の方へ歩き出しながら、獨語のやうに、『金の無い者は何處でも敗けてゐるさ。』

後には、三人妙な目付をして顔を見合はせた。

が、其の日の夕方、劍持と私と連れ立つて歸る時、玄關まで來ると、一足先に歸つた筈の高橋が便所から出て來た。

『何うだ、飲みに行かんか？』

突然に私はさう言つた。すると、

『さうだね、可いね。』と向うも直ぐ答へた。

一緒に歩きながら、高橋の様子は、何となくさういふ機會を得たことを喜んでゐるやうにも見えた。そして彼は、少し飲んでも赤くなる癖に、いくら飲んでも平生と餘り違つたところを見せない男だつた。飲んでは話し、飲んでは話して、私などは二度ばかりも酔ひが醒めかけた。それでも話は盡きなかつた。いざ歸らうとなつた時は、もう夜が大分更けて、例の池袋の田

舎にゐる高橋には、乗つて行くべき汽車も、電車も無い時刻だつた。

『また社の宿直の厄介になるかな。』と彼は事も無げに言つた。家へ歸らぬことを少しも氣にしてゐないやうな様子だつた。

『僕ん處へ行かんか?』

『泊めるか?』

『泊めるとも。』

『よし、行く。』

其の晩彼は遂々私の家に泊つた。

## 二

かくして高橋彦太郎は我々の一團に入つて來た。いや、入つて來たといふは適切でない。此方からちよつかいを出して引き入れて了つた。

先づ私の目に付いたのは、それから高橋の様子の何といふこととなしに欣々としてゐることであつた。何處か何うと取り立てて言ふほどの事はなかつたが、(又それほど感情を表す男ではなかつたが)同じ膝頭を抱いて天井を眺めてゐるにしても、其の顔の何處かに、世の中に張り合ひが出來たとでもいふやうな表情が隠れてゐた。私はそれを、或探險家が知らぬ土地に踏込んでゐて、此處を斯う行けば彼處へ出るといふ様な見當をつけて、そしてそれに相違のないことを窺つた上で、一人で楽しんでゐるやうなものだらうと思つてゐた。餘りそくはぬ比喩のやうだが、その頃、高橋が我々と一緒に飲みに行つて、剩けに私の家へまで泊まつたのを、彼自身にしては屹度何か探險を

するやうな心持だつたらうと私は忖度してゐたのだ。

が、そんな様子は、一月か、二月の間には何時となく消えて無くなつて了つた。これは、私がそんな様子を見慣れて了つたのか、乃至は高橋自身そんな氣持に慣れて了つたのか、其處はよく解らない。兎に角、見たところ以前の高橋に還つて了つた。然しそれかと言つて、我々と彼との間に出來た新しい關係には、これと言ふ變化も來なかつた。と言ふよりも、初めは互ひに保留してゐた多少の遠慮も、日の經るとともに無くなつて行つた。そして、先づ最初に此の新入者に對する隔意を失つたのは、斯く言ふ私だつた。私は何故か高橋が好きだつた。

親しくなるにつれ、高橋の色々の性癖が我々の目に付いた。それは、大體に於いて、今までに我々の見、若くは想像してゐたところと違はなかつた。彼は孤獨を愛する男だつた。長い間不遇の境地に闘つて來たといふ趣きが何處かにあつた。彼は路を歩くにも一人の方を好んだ。そして、無論餘り人を訪問する方ではなかつた。

が、時とすると、二晩も、三晩も續けて訪ねて來ることもあつた。さういふ時彼は何か知ら求めてゐた。たゞ其の何であるか我々に解らぬ場合が多かつた。それから彼は、平生の口の寡いに似合はず、よく調子よく喋り出すことがあつた。そして、それには随分變つた特徴があつた。

例へば、我々が、我々の従事してゐる新聞の紙面を如何に改良すべきか、又は社會部の組織を如何に改造すべきかに就て、各自意見を言ひ合ふとする。高橋も初めはちよくちよく口を利いてゐるが、何時とはなしに口を噤んで了つて、煙草をぶかぶか

吹かしながら、話す者の顔を交る交る無遠慮に眺めてゐるか、さもなければ、ごろりと仰向けに臥て了ふ。この仰向けに臥て、聞くでもなく、聞かぬでもなく人の話を聞いてゐるのが彼の一つの癖だつた。そして、皆があらまし思ふ事を言つて了つた頃に、ひよくと起きて、

『それは夢だ。今からそんな事を言つてゐると、我々の時代が来るまでには可い加減飽きて了ふぞ。』といふやうなことを言ふ。

其の所謂我々の時代のまだ／＼來ないこと、恐らくは永久に來る時の無いことをば、我々もよく知つてゐた。我々ももう野心家の教師に煽てられてストライキをやるやうな齡ではなかつた。が、高橋にさう言はれると、不思議なことには、「成程さうだつた。」といふ様な氣になつた。つまり高橋は、走つて來る犬に石でも抛り付けるやうに、うまく頃合を計つて言葉を挿むから、それで我々の心に當るのだ。そして妙に一種の感慨を催して來る。それを見て高橋は、「はゝゝゝ。」と格別可笑しくも無ささうに笑ふ。

一體高橋には、人の意表に出でようとしてゐたのか、或はそれが彼の癖だつたのか解らないが、人が何か言ふと、結末になつて、ひよいと口を入れて、それを轉覆かへして了ふやうな、反對な批評をする傾向があつた。その癖、それが必ずしも彼の本心でないやうな場合が多かつた。

社の同僚に逢坂といふ男があつて、その厭味たつぷりな、卑しい、睡でもひつ掛けてやりたいやうな調子が、常に我々の連中から穢い物か何ぞのやうに取扱はれてゐた。或時安井が其奴

から、「君は何時でも背廣ばかり着てゐるが、いくら新聞記者でも人を訪問する時にや相當の禮儀が必要ぢや。僕なんか貧乏はしちよるが、洋服は五通り持つとる。」と言はれたと言つて、ひどく憤慨してゐたので、我々もそれにつれて逢坂の惡口を言ひ出した。すると、黙つて聞いてゐた高橋はひよいと吸ひさしの巻煙草を遠くの火鉢へ投げ込んで、

『僕は然しさほにも思はないね。』

如何にも無難な調子で言つた。

『何故？』と劍持は叱るやうに言つた。

『何故つて、君、逢坂にやあれで却々可愛いところがあるよ。』

安井は少しむきになつて、

『君は彼あいふ男が好きか？』

『好き、嫌ひは別問題さ。だが、君等のやうに言ふと、第一先あ逢坂と同じ社にあるのが矛盾になるよ。それほど彼奴が共に耐すべからざる奴ならばだ、……先あ何方にしても僕は可いがね。』

さう言つて、何と思つたか、ごろりと横になつて了つた。

『可くはないさ。聞かう、聞かう。』安井は追つ掛けるやうに言つた。『君が何故あんな奴を好くんか、それを聞かう。』

高橋は一寸の間、恰度安井の言葉が耳に入らなかつたやうに、返事もしなければ、身動きもしなかつた。「何故斯う人の言ふことに反對するだらう？」私はさう思つた。すると、彈機仕掛みたいにくくりと起き返つて、皮肉な目付をして我々の顔を一わたり見渡した。そして、

『言つても可いがね。……言ふから、それぢや結末まで聞き給

へ。可いかね？ 君等は何といふか知らないが、無邪氣といふことは悪徳ぢやあないね？ 賞めるべきことでは決してないが、然し悪徳ぢやないね、可いかね？ 逢坂は無邪氣な男だよ。……」

『それはさうさ。然し——』と私は言はうとした。

高橋は鋭い一瞥を私に與へて、『例へばだ、社で誰が一番給仕に怒鳴りつけるかといふと、政治部の高見と僕等の方の逢坂だ。高見君はあれあ、鉛筆が削つても、削つても折れると言つて、小刀を床に置き附ける癪癪持だから、爲様がないが、逢坂のまあ彼の聲は何といふ聲だえ？ それに彼の恰好よ。まるで給仕を噛み殺して丁ひさうだ。さうして其の後で以て直ぐ、〇〇だとか、△△だとか、すべて自分より上の者に向ふと彼の通りだ。世の中にや随分見え透いた機嫌の取り方をする者もあるが、あんなのは滅多にないよ。他で見てゐて唾を引つ掛けたくなる。それに、暇さへあれば我々の間を廻つて歩いて、彼の通り幫間染みた事を言ふ。かと思ふと又、機會さへあれば例の自費自費だ。でなければ何さ、それ、「我々近代人」と来るさ。ははは。一體彼奴は、今の文學者連中と交際してるのが、餘つ程得意なんだね。そして其奴等の口眞似をして一人で悦に入つてゐるんだ、淫賣婦が馴染客に情死を迫られて、逃げ出すところを後から斬り付けられた記事へ、個人意識の強い近代的女性の標本だと書いた時は、僕も思はず吹き出したね。

ところがだ、考へてみると、それが皆僕の前提を肯定する材料になる。無邪氣でなくて誰があんな眞似が出来る？ 我々自身を省るが可い。我々だつて、何時でも逢坂を糞味噌に貶して

ゐるが、底の底を割つてみれば彼奴と同じぢやないか？ 下の者には何も遠慮をする必要がない。上の者には本意、不本意に拘らず、多少の敬意を表して置く。これあ人情だ。同時に處世の常則だよ。同僚にだつてさうだ、誰だつて悪く思はれたくはないさ。又自分の手柄は君等にしろ、無論僕にしろ、成るべく多くの人に知らせたいものだ。流行言葉も用つて見たしな。たゞ違ふのは、其の同じ心を、逢坂が一尺に發表する時に、我は一寸か二寸で済まして置くだけのことだ。何故其の違ひが起るかと云ふと、要するに逢坂が實に無邪氣な人間だといふに歸する。所謂天真爛漫といふ奴さ。さうしてだね、何故我々が、其の同じ心を逢坂のやうに十分、若くは、十分以上に發表することを敢てしないかといふと、之は要するに、何の理由か知らないが、兎に角我々には自分で自分に氣差かしくてそんな事が出来ないんだ。そして其の理由はといふと、——此處ではつきり説明は出来ないがね。——正直に先あ自分の心に問うて見給へ。決して餘り高尚な理由ではないぜ。——』

『君は無邪氣、無邪氣つて云ふが、君の言ふのは畢竟教養の問題なんぢや。』劍持はしたり顔になつて言つた。『さうぢやないか？ 教養と人格の問題よ。其處が學問黨と非學問黨の別れる處なんぢや。』

『すると、何か？ 人格といふ言葉は餘り抽象的な言葉だから、暫く預かるとして、教養といふことはだね。つまるところ、教養があるといふことと、自己を欺く——少くとも、自分を騙すといふことと同じか？』

『高橋君。』安井が横合から話を奪つて、『君は無邪氣は悪徳だ



とか、惡徳でないとかいふが、そんなことは我々に全く不必要ぢやないか？ 我々の言つとつたのは、善惡の問題ぢや無い。好惡の問題だよ。逢坂の奴の性質が無邪氣であるにしろ、ないにしろ、兎に角奴の一舉一動に表はれるところが、我々の氣に喰はん。頭の方から足の先まで氣に喰はん。氣に喰はんから氣に喰はんといふに、何の不思議もないぢやないか？」

『それがさ。——あゝ面倒臭いな。——先考へてみるさ。氣に喰はんから氣に喰はんといふに何の不思議はない。それは、我々が我々の感情を發表するに何の拘束も要らんといふことだ。それも可いさ。然し發表したつて何なる？ 可いかね？

君はまさか逢坂がいくら氣に喰はんとつて、それで以て逢坂と同じ日の下に、同じ空氣を吸つてることまで何うかしやうとは思はんだらう？ 現に同じ社にゐる。同じ社會部に屬してゐる。誰だつて、あんな奴と一緒に生きてるのが厭だと言つて死ぬ莫迦はないさ。先方を殺す者もない。さう言ふと大袈裟だが、

實際我々が、感情の命令によつて何れだけ處世の方針を變へて可いかは、よく解つてゐる話ぢやないか？——逢坂が昨日、自分の方が先に言ひ付けたのに、何故外の用を先にしたと言つて給仕を雇つてゐたづけが、感情を發表するに正直だといふ點では、我々は遠く逢坂に及ばないよ。さうだらう？ 若し其の逢坂が我々の唾棄すべき人間ならばだ、我々の今のやうな言動も同時に唾棄しなくちやならんぢやないか？ あんな奴の齒口を利くより、何かもう少し氣の利いた話題はないもんかねえ。』

高橋は一座を見廻した。我々は誰も皆、少し煙に捲かれたやうな顔をしてゐた。

『それはさうさ。話題はいくらでもあるが、然し可いぢやないか？ 我々は何も逢坂を攻撃して快とするんぢやない。言はば座興だもの。』と私は言つた。

『座興さ、無論。それは僕だつて解つてるよ。僕が言つたんだつて矢張座興だよ。故意に君等を攻撃したんぢやないよ。』

『此奴は随分皮肉に出來てる男さね。——つまり君のいふのは平凡主義さ。それはさうだよ。人間なんて、君、そんなに各自違つてるもんぢやないからねえ。』

安井は妙な所で折れて了つた。一人、劍持だけはまだ何か釋かでない目付をしてゐた。

『はははは。』と高橋は、取つて着けたやうに、戲談らしい笑ひ方をした。『然し僕は喋つたねえ。僕はこんなに喋ることは滅多にないぜ。——然し實を言ふと、逢坂は僕も嫌ひだよ。あんな下劣な奴はないからねえ。』

『さうだらう？』安井は得意になつた。

『君も何だね、随分彼奴を虐待しとるのう。』

逢坂がぶく／＼に肥つた身體を、足音を偷むやうにして運んで來て、不恰好な鼻に鼻眼鏡を乗せた顔で覗き込むやうにしながら、「君の今朝の記事には大いに敬服しましたよ。M——新聞で書いとるのなんか、ちつとも成つちよらん。先刻彼處の社會部長に會つたから、少し僕等の方の記事を讀んでみて下さいと言つてやつた。」など言ふと、高橋は、先づしげ／＼對手の顔を見て、それから外方を向いて、「いくらでも勝手に敬服してくれ給へ。」といったやうな言ひ方をするのが常だつた。